

# 紙季折々

しき❀ありあり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.10

## 元気な森づくりのための間伐

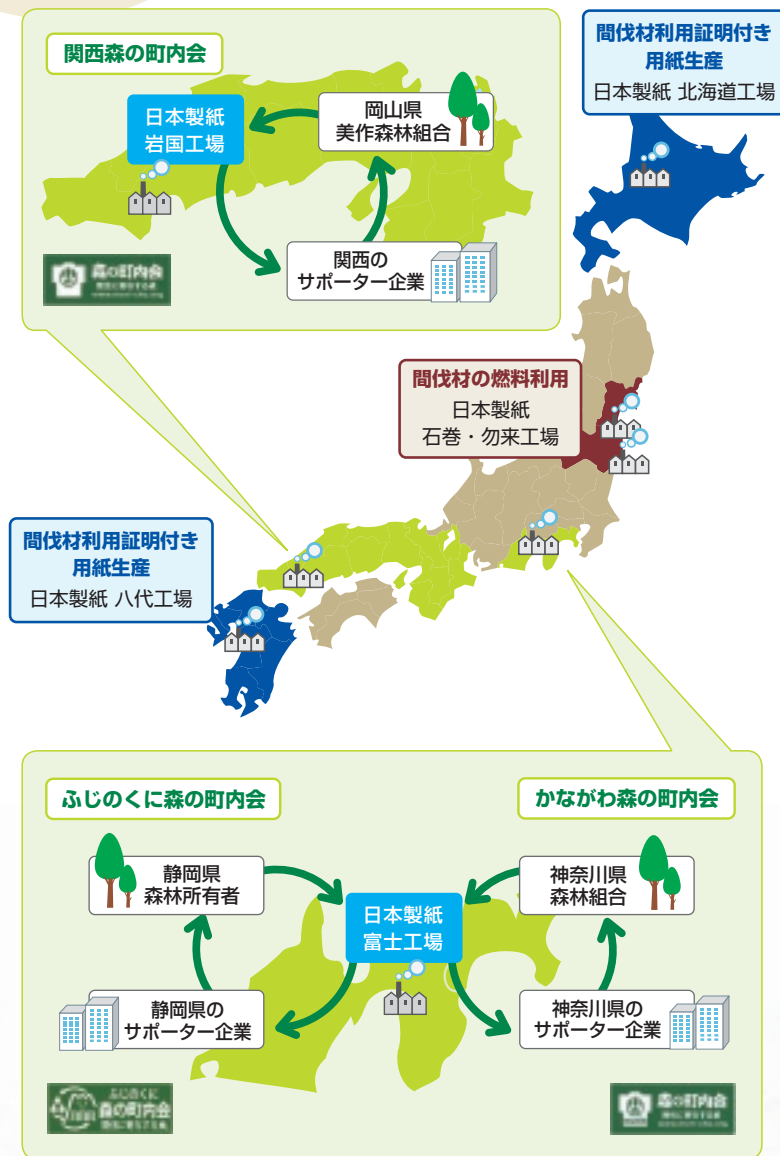
森林は、多くの恩恵を私たちに与えてくれます。しかし、その恩恵を受けるためには自分たちの手で森林を元気に育てる必要があります。私たち日本製紙グループは、多くの方々とともに、元気な森づくりのために間伐の促進に取り組んでいます。





## 日本製紙グループの間伐材利用促進に向けた取り組み

日本製紙グループは、従来から間伐材を含む国産材を原料として利用しており、2010年度までにその利用率を30%以上にするという目標を掲げておりましたが、2009年度にこれを達成しました。また、間伐材の利用をさらに進めるため、現在、下記の取り組みを推進しています。



### ◎地域との連携

#### 森の町内会への協力

「森の町内会」は、環境NPOオフィス町内会が始めた森林の育成を支援する仕組みです。企業の環境貢献として、間伐促進費を付加した「間伐に寄与する紙」を企業に購入してもらうことにより、間伐費用の不足分を補うものです。



### ◎原料や燃料への有効利用

#### 間伐材利用証明付き用紙生産

間伐材の伐採、流通過程を明確にし、クレジット方式による間伐材利用証明を行っています。

注) クレジット方式  
製品に間伐材が実際に配合されているか否かを問わず、間伐材の使用量に応じて、製品に間伐材が配合されているとみなす方式。

#### 間伐材の燃料利用

主に紙の原料にできない間伐材の枝や根をボイラーの燃料として使用することにより、間伐材の有効利用と化石燃料の使用量削減に取り組んでいます。

今、森の荒廃が問題になっています。

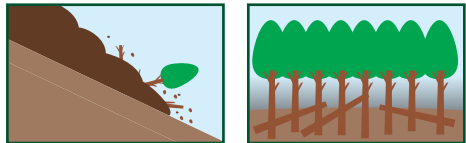
日本の国土の約2/3を占める森林は、次の3つに大別されます。

- ・**原生林**：災害や人の手が入った痕跡がない森林。
- ・**二次林**：伐採や災害などで失われた後に自然に再生している森林。
- ・**人工林**：植林や種をまくことで人工的に造成された森林。

現在、全国で二次林や人工林の荒廃が問題となっています。これらの森林にも、以前は薪炭材を取った、木材を生産するために、人の手が入っていました。しかし、電気・ガス・石油にエネルギーを依存する燃料革命や、木材輸入の自由化による国産材の利用の減少により、日本の林業は衰退し、森林が放置され、荒廃していったのです。

荒廃した森は、土砂災害などを引き起こします

- 手入れをしないまま放置すると…
- 木々が混み合い、日当たりが悪くなる
- 下草や低木が生えなくなる



#### 土砂くずれ

木々が混み合うと、地面に日光が当たらないため、下草が生えず、地表がむき出しになります。雨などで土が流れ去り、土砂災害等が起きやすくなります。

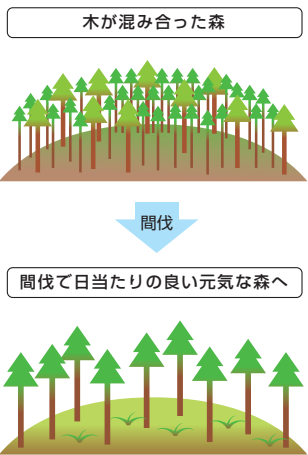
#### 倒木

木々が混み合うと、枝葉や幹が貧弱になり、根の発達も悪くなります。風雪を受け、森林が壊滅的な被害を受けることもあります。

森の荒廃を防ぐには、間伐などの手入れが必要です

原生林は若齢から老齢まで様々な発達段階の木々が構成されますが、人工林は発達段階が近い木々で構成されます。そのため、木々の枝葉が重なり合い、十分な日光が得られなくなり、木々の成長が妨げられることにより様々な問題が発生します。また、二次林では、人の手が入らないため、木々が高齢化し病害虫による集団枯死を招くこともあります。

#### 間伐が必要なのはなぜ？

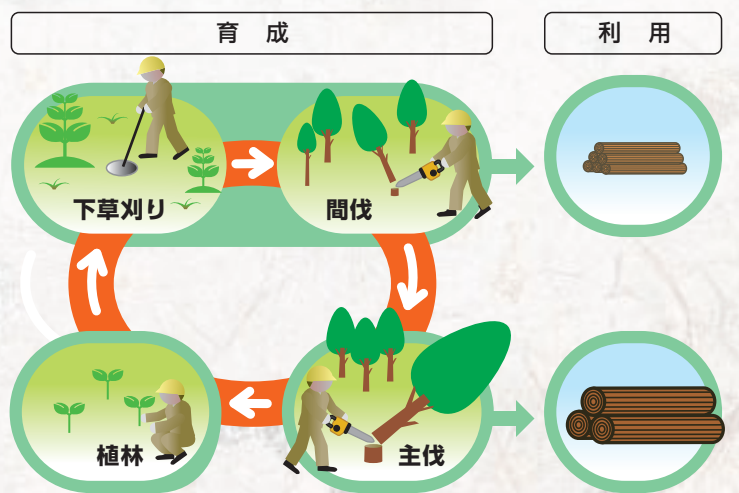


#### なぜ密集させて植えるの？



日本の人工林の荒廃を防ぐには、植林・育成・伐採のサイクルを回し、国産材の利用を促進する必要があります。しかし、現在は林業従事者の高齢化や木材価格が低迷し、間伐のコストが間伐材の売却価格を上回っているため、間伐が進んでいません。そこで、間伐のコストを補い、元気な森を育てようという活動が広がりました。間伐の促進のためには、行政、林業、メーカー、消費者の連携が重要です。私たち日本製紙グループも、こうした連携を意識した取り組みを進めるとともに、原料や燃料への間伐材利用などに取り組んでいます。

#### 元気な森のサイクル



国産材の利用が、元気な森を育てます

### 間伐促進の先駆者に聞く

### INTERVIEW



はんがい えいじゅく  
半谷 栄寿氏  
環境NPO オフィス町内会  
事務局代表

#### Q オフィス町内会から、森の町内会への展開についてお聞かせください。

A 1991年当時、都内のオフィスの紙ごみは社会問題になっていました。そこで、環境NPOオフィス町内会を立ち上げ、オフィス古紙の共同回収を20年間継続しています。2005年からは、間伐と間伐材利用を促進して健全な森づくりに貢献する「森の町内会」活動を展開しています。東京では111社の企業が「間伐に寄与する紙」を使用し、岩手県内で毎年40haの間伐を促進しています。「森の町内会」の社会的役割は、国産材利用のマインドを広めていくことです。国産材の利用こそが日本の森を元気にする原動力になるのです。

#### Q 間伐材利用の促進について、日本製紙グループに期待することは何でしょうか。

A 間伐材を含む国産材の利用を拡大するには、森林側の取り組みだけでなく、利用者側が積極的に国産材を使おう、木を切って利用することが森を元気にするのだというマインドを高めていく必要があります。日本製紙グループは、間伐材の調達・紙の生産・販売という「森の町内会」の実際のラインを稼働させるだけでなく、利用者の意識啓発にも貢献してくれています。今後も、「森の町内会」を通して国産材利用のマインドを全国に拡大していくパートナーとして、一緒に知恵を出し合いながら、活動を展開していきたいと思っています。





PROFILE

ひびの・かつひこ

1958年岐阜市生まれ。  
東京藝術大学大学院修了。  
大学在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催する他、パブリックアート・舞台美術など、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多く行っている。近著に「日比野克彦展「日々の旅に出る。」」(鹿児島県霧島アート・森)、「あしたの君へ」(新潟日報)、「日比野克彦アートプロジェクト「ホーム・アンド・アウェー」方式 記録集」(金沢21世紀美術館)などがある。

でも、自分が死んでからこの絵がどうなるかというよりも、今表現したいという気持ちが強かった。百年後に色褪せないとか筆の滑りがいいという今までの絵描きの注文とは違う立ち位置で始めたかったんですね。ダンボール以外にも、わら半紙や新聞紙にも描いてました。学生だったんで手に入りやすくて安いというのも魅力でした。

絵を描くということは紙に筆で描くことに限らないんです。思い描いて、それをカタチにするということが絵を描くということなんですね。たとえばお母さんが今日の夕飯は何にしようかなと思って、イメージして、料理する。それも絵を描くことなんです。

**絵を描くことは紙に筆で描くことに限らないんです。**

ポップでグラフィティ的なダンボール作品で著名な芸術家・日比野克彦さんに「絵を描く」ことの本質について語っていただきました。

大学院の1年生(1982年)の時だったんですが「日本グラフィック展」という公募展にダンボールに描いた絵を出したら大賞をもらいました。なぜダンボールだったのかというと、他人と違うものを生み出すためには、材料から違った方がオリジナリティの発現の確率も高くなると思ったからです。

絵の具に適合した紙が画材屋さんには売っていて、絵描きはオリジナリティを探す上で当然紙にもこだわるわけです。たとえば高級な水彩紙とか和紙、あるいはしみ止めを施している麻紙とか。その一方で梱包材料に適した紙としてのダンボールがある。そんな紙を土台にして絵を描いたらどうなるんだろうという発想です。紙に限らず、そんなふうにする人はあんまりいないんだけど、というところから次なる発想は生み出されていきますよね。

ダンボールを使って一番言われるのは、「十年、二十年と経ったら褪せちゃうよ」とか、「日焼けして脆くなるよ」という保存性についてです。

自分は絵は描けませんとか、絵は知識がないと観れないよねというのはすごく狭い範囲の美術ですし、魅力の一部でしかないと思います。今、絵画の範囲、魅力、機能をもっと広げていかないと、いつまで経ってもテクニックの話になる。そういう価値観が世の中でまかり通っているのは社会として危険だなという思いがあるんですね。

2003年に新潟の山の中で「明後日朝顔プロジェクト」というワークショップを始めたんですけど、それは朝顔の育成を通して、人と人・人と地域・地域と地域のコミュニケーションを促し、現代社会における人と地域の関係を検証するプロジェクトなんです。

おじいちゃんやおばあちゃん達に「絵を描きましょう」と言ったら、「絵は描けません」と言われたらそこから先へは進めない。それで、地元の人達と一緒にアート活動をするには何があるかなと話していたら、おばあちゃん達が「うちは野良仕事しかできないから」と言うわけです。じゃあ、一緒になにか花を育てましょうかということになって廃校になった小学校の花壇で朝顔を育てることにしたんです。木造二階建ての校舎の屋根まで伸びるといいよねとみんなで毎日世話をしていたら、夏にはほんとうに屋根まで伸びて小学校を覆うまでに育って、こういう共同活動ができるんだなということがわかった。

社会の中における芸術の機能性・多様性を試みるこのワークショップは今は22の地域に広がって、おじいちゃんもいるし、若者もいるし、親子連れもいて、いろんな人達が参加しています。いろいろな価値観が混ざってこそそのアートだから、年齢層が幅広いというのは健康的なワークショップだと思うし、「朝顔の種」を代々繋げていきたいと思っています。



「明後日朝顔プロジェクト」の様子

未来のための「いのちの森づくり」を実現する植樹を実施

5月30日、日本製紙グループは豊かな森林を未来に残していく取り組みの一環として、独自の植樹方式により国内外で森林再生を実践している宮脇昭・横浜国立大学名誉教授の指導のもと、当社グループの菅沼社所有林(群馬県利根郡片品村)の丸沼高原リゾートで植樹を実施しました。前日には前夜祭として、宮脇先生の講演会を開催し、翌日の植樹には地元片品村の皆様をはじめ、日本全国から約700人の方にご参加をいただきました。



TOPIC

編集後記

今回、お話を伺った環境NPOオフィス町内会が運営する「森の町内会」はボランティア活動の一つですが、この活動は「こころざし」だけではなく「お金」も循環する市場経済の仕組みとして成り立っている点が他のボランティア活動と大きく異なっていると感じました。日本には間伐を必要としている森林が数多くあります。今後も、オフィス町内会と共にこの活動を充実させていきたいと思っています。(石川)

お問い合わせ先

株式会社日本製紙グループ本社 CSR本部 CSR部 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2 TEL: 03-6665-1447  
ホームページ: <http://www.np-g.com/inquire/> (お問い合わせ) <http://www.np-g.com/appliform/> (資料請求)

